

## 特集 「生きる力と希望をはぐくむ教育の推進」

—— 平成 26 年度 「授業の達人大公開」 ——

### 小・中一貫教育を踏まえた心肺蘇生法への 継続的な保健授業の実践

～「ASUKA モデル」から取り組むバイスタンダーの育成を目指して～



北区 宮原中学校 教諭 加藤 郁夫

#### 1 はじめに

年間 7 万人を超える心停止による突然死。いつでも、どこでも、だれにでも起こり、心停止傷病者の生存率を改善するためには、バイスタンダー（救急現場に居合わせた人）が迅速に心停止を認識し、119 番に通報し、心肺蘇生 (CPR) を開始することが不可欠である。小学校から中学校への継続的な取組により、意識のない傷病者への応急手当や心肺蘇生が遅延なく実践できる「バイスタンダーの育成」を目指す授業の実践に取り組んだ。

#### 2 工夫した点と実践内容

##### (1) 小・中一貫した心肺蘇生カリキュラムの工夫

ア 中学校 1 学年段階で、AED を含む心肺蘇生を行うことができるための実践。

小学校 5 年生から、系統的・計画的に発達段階に応じて、計画立てて学習に取り組む。小学校 6 年生では、救命入門コース (90 分) の取得を目指す。中学校では、「普通救命講習 I」終了を到達目標とする。

イ 事故発生時に自分ができる最善の行動をとることができるための実践。

「自己効力感を高め、判断する力、行動する力、できる事を繰り返す力を付けさせる。」

##### (2) 実技活動を積極的に取り組ませる工夫

保健学習だけでなく、総合的な学習の時間や特別活動と連携させて「命の授業」として取り組んだ。自分の命と他人の命を大切にする心、「救命の心」を育てる授業とした。

- ・今、できる事をやれる人になろう。
- ・子どもだから、できないのではなく、子どもでもできる事がある。

#### 【救命の心】

生命…大切なもの、かけがえないもの

自分の命を大切に思い

他人の命を大切に思う心

今、できる事をやれる人になろう!

#### 命の授業

子どもだからできないのでなく

子どもにもできる事がある。

胸骨圧迫等の実技では、興味や関心があっても児童生徒は積極的に取り組む自信がもてず不安に思う者が多い。安心して活動できるように取り組み方の約束を導入の場で確認する。

- ・「できない」と「やらない」は違うよね。
- ・「あっそうか」に出合えるまで続けようね。
- ・「あっそうか」に出合えるまで続けることが「頑張っている」ことですね。

教材は動画やスライドを使い、視覚的に分かりやすくした。短時間で理解しやすいようにすることにより、一人一人が体験できる時間を確保した。

実習ではリトルアン、簡易 AED トレーラー

を活用した。リトルアンを同じ小学生の女の子、練習のパートナーとして学ぶことを伝えることにより、3人組のチームであれば、4人組として活動させることで実習の意識を高めさせた。

### (3) 胸骨圧迫・AEDの指導の工夫

3人組で実習を行う。圧迫の方法を指導すると同時に、交代の方法を指導する。圧迫の質を強調しすぎると体験する圧迫回数が少なくなる。少なくとも30回は連続して圧迫体験を行う。交代までの連続した回数(30回)を責任をもって行わせることにより、技能の向上を目指した。技能の向上は圧迫回数に比例する。「交代します。5、4、3、2、1、ハイ。」を交代の合言葉に設定した。

AEDの指導では、除細動器としての使い方の指導とともに、心室細動など不整脈について理解させた。AEDは万能ではなく、早い時期に使用する必要性を強調する。また中学1年生では、「呼吸・循環機能の発達」の単元との関連を図るようにした。

緊張感をもって応急手当の実習を行わせるために、救命の流れをスタートしたら最後まで実習を止めないことを確認する。「命にやり直しやりセットはない。」自分の役割と同時に、全体の流れを知ることにより、協力し合い、アドバイスをし合える活動になる。「教える→教わる」という学習サイクルを繰り返すことにより、定着を図った。

## 3 実践を振り返って

### (1) 小・中一貫した心肺蘇生カリキュラムの工夫

新学習指導要領では、保健体育の保健分野の学習内容に心肺蘇生法が取り入れられ、必要に応じてAEDを扱うことが可能になった。そこで小学校では「救命入門コース」、中学校では「実技講習」を計画的・継続的な取組とすることにより、非常に効果的であった。特に小学生の心肺蘇生法を学習する能力は高く、BLS(Basic Life Support)教育は人の命の大切さを教える教育への効果も大きい。

### (2) 実技(体験)活動を積極的に取りまとめる工夫

命の授業として、「自助・共助」・「救命の心」を通して取りまとめることにより、「今の自分ができることを知ろう」とする意欲となった。安心して、授業に取り組める場の工夫が大切である。教材も動画やスライドなどの工夫も大切だが、その場で提示する機会があれば積極的に提示したほうが圧倒的に効果的である。

### (3) 場の設定、指導内容の工夫

圧迫の質を上げるために、個人的に指導しすぎると、自信がなくなり、すぐに圧迫をやめてしまう。交代をしながら練習させることにより、連続した圧迫体験が行われ、技能向上には効果的である。指導者の言葉は、「こうするともっとよくなるね。」と言って指導することが効果的である。

## 4 まとめ

小・中の連携を図り心肺蘇生法に取り組んできたが、児童生徒の体格の差により、規定の深さまで押せないこともある。しかし、胸骨圧迫の理論は十分に学ぶことができる。成長すれば自分がしっかりと胸骨圧迫できるようになるだけでなく、周りの大人に方法を伝えることもできると思われるので、これからも実践し「バイスタンダーの育成」を推進していきたい。

